看護実践学会誌　Journal of Society of Nursing Practice, Vol.35, No.1, pp.91～99, 2023

研 究 報 告

高校生のための「親子交流を通して親になることを考える」プログラムの効果に関連する要因の検討

Factors Related to the Effectiveness of “The Think about Becoming a Parent” Program for High School Students

千原　裕香，西村　真実子

Yuka Chihara，Mamiko Nishimura

石川県立看護大学

Ishikawa Prefectural Nursing University

キーワード
子ども虐待予防，親になること，高校生，次世代育成教育，被愛情感

Key words
child abuse prevention，becoming a parent，high school student
parenthood education，feeling of being cared for

要　旨

本研究の目的は、子ども虐待の未然防止をめざして高校生の親世代になることに対する意識を高めることをねらいとして開発した「親子交流を通して親になることを考えるプログラム」の効果に関連する生徒側の要因を明らかにすることである。研究対象者は13か所の高校の１年生3,036人で、有効回答数2,381人を分析対象とした。生徒側の要因として性別、きょうだいの有無、祖父母との同居の有無、乳幼児との接触経験、被愛情感を、プログラムの効果指標として親世代になることに対する意識尺度について、プログラム参加前後に質問紙調査を行い、要因別に２元配置分散分析を実施した。その結果、本プログラムの効果に性別、乳幼児との接触経験、被愛情感が関連することが確認された。被愛情感においては交互作用が認められ、被愛情感が不十分な生徒は十分な生徒よりも有意に親子関係に対する意識が向上していた。以上より、被愛情感が不十分な生徒の存在に配慮したプログラム内容にすることが効果的なプログラムのために重要であることが示唆された。

連絡先：千原　裕香
石川県立看護大学
〒929-1210　石川県かほく市学園台１-１

はじめに

近年、子ども虐待は喫緊の社会問題となっている。不適切な養育は子どもの発達に広範囲で深刻な衝撃を及ぼすことが明らかとなっており[1)]、発生の未然防止が極めて重要である。これまでの研究で子ども虐待を引き起こすリスク因子が検証され、親側の要因・子ども側の要因・環境要因などが複雑に絡み合って子ども虐待という行為に結びつくと考えられている[2)]。その要因の１つに親になるための準備不足がある。親になる前の「育児経験」や「子どもと関わった経験」が減少し、親になった時に育児不安に陥りやすい状況にあることが指摘されている[3)]。親としての資質は、子どもができて初めて身につくものではなく、幼少期からの体験の積み重ねによって少しずつ育まれ、発達していくものと考えられており、生育過程での乳幼児との接触体験の量や質、自分の生育歴への自己評価など過去の生育体験の影響が大きい[4)]と言われている。また伊藤は、親としての資質とは「親としての役割を果たすための資質だけではなく、親とならない場合であっても、社会の一員として備えておくべき資質」[5)]と述べており、親になるものだけが必要な資質ではなく、親になる・ならないに関わらず必要な資質である。そこで本稿では、親になる前の世代がもつ、段階的に形成される親としての資質を「親世代になるための資質」と表現する。

このような背景から近年、「親世代になるための資質」を育むための次世代育成教育の重要性が認識され、さまざまな取り組みが行われている。海外では子どもたちの共感性を育むことを目的とした「Roots of Empathy」[6)]や、高校生の子育てに対する知識の向上を目指した「The Parenting Curriculum」[7)]などがある。日本においては、中学生や高校生が家庭科の保育学習の中で保育園などに出向き、乳幼児との関わりを中心に行う保育体験学習が行われている。保育体験学習の効果について、中谷が文献レビューを行っており、①肯定的な情動体験と意欲的な学び、②子どもへの関心と発達理解、③幼児のイメージの変化、④自己理解の深化と内面的成長の促進、⑤「子どもを育てる存在」としての成長促進[3)]に整理している。一方で、幼児との関わり比重が置かれやすく「子育て」の部分に触れる機会が少ない[8)]ことや、自分が「親になること」について具体的にイメージし「親の役割を理解する」段階に至るためには学習内容や実施形態について検討していく必要がある[3)]との課題が指摘されている。千原ら[9)]も「親世代になるための資質」を高めるためには、子どもに関する意識を高めるだけでなく、子育てや親になることに関する意識を高める必要があることを見出している。つまり親世代になるための資質を育むための次世代育成教育では、自分が「親になること」について考える機会となることが重要であると考えられる。

子ども虐待の未然防止を考える時、「世代間伝達」についても触れておく必要がある。「虐待は虐待を生む」、つまり虐待の被害者である子どもが成長すると今度はその子どもが虐待やネグレクトする親になるということである。不適切な養育が認められる母親はそうでない母親と比べて、子ども時代に自分自身も実親から不適切な養育を経験していた割合が多い[10)]ことや、親からの直接的な虐待が無い場合においても、親自身が過去に被虐待経験を持ち、その愛着外傷を「生傷」のまま抱え続けながら親となった場合、自分の子どもへの養育行動にも影響し、子どもは被虐待児と同様の心理発達上のリスクを負う[11)]ことが報告されている。一方、自分が親になることに対して肯定的な感情を持て、自分の親との関係を受け止めることができると、被虐待の経験が直線的に養育行動や子どもとの関係性に否定的な影響を及ぼすことは認められないこともある[12)]との報告もある。つまり、親になる前から段階的に少しずつ自分が親になることや自分の親との関係を肯定的に考えられように支援することで、親になった時の葛藤や苦しみを小さくすることが可能であると考えられる。次世代育成教育は親になる前の時期から始める不適切な養育の世代間伝達を断ち切るアプローチとしても期待できると考えられる。

そこで、私たちは、行政機関（いしかわ結婚・子育て支援財団、以下財団と表記する）、教育機関（高校家庭科教諭・A県高等学校教育研究会家庭部会）、福祉機関（A県内のNPO法人などの子育て支援団体、以下子育て支援者と表記する）と共に、高校生が乳幼児だけでなくその親たちとも交流する「親子交流を通して親になることを考えるプログラム」（通称：親子交流授業プログラム、以下プログラムと表記する）を開発した。先行研究において、女子の方が子どもへの親和や子育てへの受容が高い[13)]ことや女性の方が男性より乳幼児との接触体験効果がみられやすいこと[14)]、親準備性の習得には乳幼児との過去の接触経験が関与していること[4)8)]、１回程度の乳児との交流体験

では乳児に対する否定的な反応を示す対象者が存在すること[15]が明らかになっており、生徒の背景要因により本プログラムの効果に違いが生じる可能性が考えられた。そこで本研究は、本プログラムの効果に関連する生徒側の要因を明らかにすることを目的とした。プログラムの効果に関連する要因を明らかにすることで、親になる前から始める子ども虐待の予防対策としてより効果的なプログラム開発の基礎データが得られると考えた。

研究方法

1.「親子交流を通して親になることを考える」プログラムの概要[16]

1）プログラムの実施体制

プログラム実施体制の構築・運営担当の財団、プログラム実施担当の高校家庭科教諭、高校生との交流に協力してくれる親子が安心して参加できるようにプログラムの実施をサポートする子育て支援者、プログラムの評価担当の著者らが所属する研究グループの4機関で連携して実施した。

2）プログラムの構成

家庭科の授業の中で行われ、「事前授業」「交流授業」「事後授業」の順で3回の授業で構成された。1回の授業時間は約60分で約1か月の間で行われた。

(1) プログラム実施に向けての準備と参加する乳幼児親子の確保

財団が、A県内の全高校に対し本プログラムの実施希望校を募集した。

プログラムに参加する乳幼児親子は、財団からチラシなどを通じて公募した。募集の基準は、乳児～未就学児とその保護者とした。参加希望の親子には財団が運営する「ファミリーバンク」システムに登録してもらい、スマートフォンなどから参加申込みを求めた。参加が決定した親子には、家庭科教諭や子育て支援者らから事前オリエンテーションを行い、可能であれば抱っこなどの子どものお世話を生徒に体験させてほしいこと、子どもがぐずっても大丈夫でありその姿を生徒に見せてほしいことなどを伝えた。

(2) 事前授業

事前授業では、交流授業に向けて子ども・子育て・親役割などへの関心・意欲を高めるための授業を行った子育てに関する新聞記事を読んだり、男女ペアで親になり子育て中の親の一日を考えるなど、生徒やクラスの特性に合わせた教材を用いて子どもや子育てへの理解を膨らませ、次回の交流授業で乳幼児の親たちに質問する内容を考えた。

(3) 交流授業

約5～10組の乳幼児親子に高校に来てもらい、生徒約5～6人と親子1～2組で1グループとなり交流した。高校生は、親たちが子どもをお世話する様子を観察し、実際に抱っこしてあやすなどの子どものお世話を体験した。また親たちが持参した母子手帳等を見せてもらいながら子どもや子育てに関する話を聞いた。交流授業には、子育て支援団体スタッフである子育て支援者がサポーターとして参加し、高校生と乳幼児親子との交流が促されるよう高校生の様子を注意深く観察し、必要時具体的な説明を加え、乳幼児の気持ちを代弁し高校生に伝えた。また同時に、親たちが高校生に子どもや子育てに関する経験を話せているか観察し、話し合いが止まっているグループがあればそこに入り親たちが話しやすいように支援した。先行研究で家族問題に葛藤を抱える生徒も多くなっていることから、家族や保育、育ちの振り返りの作業においては配慮が必要となると示唆されている[3]。そのため家庭科教諭・子育て支援者から意図的に高校生に、乳幼児親子と交流する中で子どもが嫌いなどネガティブな感情も含めてどんな感情が湧いてきてもいいんだよというメッセージを伝えるよう配慮した。

(4) 事後授業

交流授業終了後1週間以内に「事後授業」を実施する。事後授業では、交流授業での乳幼児親子との交流を通して、子どもや子育てに関する話を聞いてどう感じたか、あるいは「親になること」についてどう感じたか振り返り、インタビュー内容や感想を壁新聞風にまとめたり、クラスで共有したりした。

2．対象施設と対象者

本プログラムの実施を希望した高校の中で、必修科目「家庭基礎」の授業としてプログラムを採用した高校を対象校とした。授業としてプログラムを実施するため、必修科目「家庭基礎」を履修する生徒は本プログラムに参加する。そのうち、質問紙調査に同意が得られたものを研究対象者とした。

3．データ収集方法

2015年9～10月に無記名による自記式質問紙調査を行った。学校長の研究協力の承諾が得られた対象校の家庭科教諭に質問紙を郵送し、研究対象者への配布を依頼した。質問紙調査はプログラムの事前授業開始直前と事後授業終了後1週間以内

の２回、集合形式で実施し、回答後は教室に設置した回収箱に投函するよう生徒に依頼した。

４．調査内容

生徒側の関連要因として、性別、きょうだいの有無、祖父母との同居の有無に加えて、先述したように親準備性の習得には乳幼児との過去の接触経験が大きく関与していることが確認されており[4)8)]、乳幼児との接触経験について尋ねた。また愛着パターンというのは世代間伝達すると言われているため、愛されて育ってきたと思うという被愛情感は自分が親になることや子育てに対する感情や考えに影響があると考えられる。そこで被愛情感について「愛されて育ってきたと思う」という質問を設け、「とてもそう思う」～「全くそう思わない」の６段階リッカート法で回答を求めた。

プログラムの効果測定指標として「親世代になることに対する意識尺度」[9)]を使用した。この尺度は青年期前期の親世代になるための資質を捉える目的で作成された尺度で、６下位尺度33項目で構成される。その内容は、「子どもとの遊び方がわかる」など子どもとの関わり方の理解や認識に関する【子どもとの関わりに対する意識：５項目】、「親子はお互いを必要とし合っている」など親と子の間の関係についての認識を問う【親子関係に対する意識：５項目】、「安易な気持ちで子育てはできない」など親になることに対する心構えや意識に関する【親になることに対する意識：７項目】、「男性が育児しやすい社会が必要である」などの項目からなる【夫婦や社会で子育てすることに対する意識：５項目】、「子どもはかわいい」などの項目からなる【子どもや子育てに対する関心・感情：５項目】、「子育てできるか心配である」などの項目からなる【子育てに対する不安：６項目（全て逆転項目）】である。回答方法は「とてもそう思う（６点）」「そう思う（５点）」「少しそう思う（４点）」「あまりそう思わない（３点）」「そう思わない（２点）」「全くそう思わない（１点）」の６段階リッカート法で得点化され、各下位尺度得点で表される。各下位尺度のCronbach's α 係数は0.76から0.94で、信頼性と妥当性が確認されている。

５．分析方法

親世代になることに対する意識尺度の下位尺度得点を算出し、記述統計と正規性の検定を行った後、性別・きょうだいの有無・祖父母との同居の有無・乳幼児との接触経験・被愛情感において、それぞれ２群間及び時間の変化パターンに差があるのか比較するために反復測定による２元配置分散分析を実施した。被愛情感については「愛されて育ってきたと思う」の設問に「とてもそう思う」「そう思う」と回答した者を“被愛情感が十分にある群”（以下、十分群）とし、「少しそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」「全くそう思わない」と回答した者を“被愛情感が十分ではない群”（以下、不十分群）と分類し比較した。本研究はサンプル数が多く、差の検定において有意であるという結果になりやすいため、効果量 η^2 を算出した。統計学的分析には、分析ソフトIBM SPSS Statistics Ver. 26.0を使用した。

６．倫理的配慮

本研究は石川県立看護大学倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：第725号）。A県内の高校の学校長宛てと家庭科教諭宛てに、プログラム参画依頼書と研究協力依頼書を郵送し文書による説明を行い、プログラム参画申出書兼研究協力同意書の提出をもって、学校長と家庭科教諭の同意を得た。対象者である高校生には文書にて研究目的、方法、個人の匿名性の保護、任意性の保障と不利益に対する配慮について説明し、質問紙の回答と回収をもって研究参加に同意が得られたものとした。家庭科教諭が質問紙を配布するため強制的にならないよう配慮し、調査は授業の課題ではないこと、成績には関係がないこと等を文書による説明と合わせて、家庭科教諭から口頭にて説明していただいた。また対象者は未成年であるため、保護者に対して文書による説明を行った。

結　果

１．質問紙配布及び回収状況

対象校は13校で質問紙を配布した高校生は3,036人であった。回収数は2,880人（回収率94.8％）、そのうち親世代になることに対する意識尺度の項目に欠損値のない2,382人（有効回答率82.7％）を分析対象とした。

２．対象者の概要（表１）

男子1,104人（46.3%）、女子1,277人（53.6%）で男女ほぼ同じ割合であった。きょうだいありと回答した者が2,122人（89.1%）と大半であった。祖父母と同居していない者の方が1,696人（73.9%）で多かった。乳幼児との接触経験に関しては、経験ありと回答した者は1,761人（73.9%）であったが、その頻度は月１回以下が44.2%と最も多かった。被愛情感については、十分群は1,696人（71.2%）、不十分群は684人（28.7%）であった。

３．プログラムの効果と生徒側の要因との関連

表１　対象の属性

n = 2,382

	項目	人数	%
性別	男子	1,104	46.3
	女子	1,277	53.6
	不明	1	0.1
きょうだい	あり	2,122	89.1
	なし	260	10.9
祖父母との同居	あり	684	28.7
	なし	1,696	71.2
	不明	2	0.1
乳幼児との接触経験	あり	1,761	73.9
	毎日～週１回程度	430	18.1
	月１～２回程度	267	11.2
	月１回以下	1,053	44.2
	不明	11	0.5
	なし	615	25.8
	不明	6	0.3
被愛情感（愛されて育ってきたと思うか）	十分群	1,696	71.2
	不十分群	684	28.7
	不明	2	0.1

生徒側の要因により親世代になることに対する意識尺度の各下位尺度得点とそのプログラム前後の変化パターンに違いがあるのかを検討した。

１）性別（表２）

男女別では、【子どもとの関わりに対する意識】、【子どもや子育てに対する関心・感情】、【子育てに対する不安】で交互作用に有意差が見られたが効果量は小さく、プログラム前後での各下位尺度得点の変化パターンは同じで、【子どもとの関わりに対する意識】、【親子関係に対する意識】、【夫婦や社会で子育てすることに対する意識】、【子どもや子育てに対する関心・感情】得点が男女ともに有意にプログラム後に上昇していた。また、【親になることに対する意識】、【子どもや子育てに対する関心・感情】は効果量が中程度で群間に有意差があり、男子より女子の方が有意に得点が高かった。

２）きょうだいの有無（表３）

きょうだいの有無では、全ての下位尺度において交互作用はなく、プログラム前後での得点変化パターンに差はなかった。

３）祖父母との同居の有無（表４）

祖父母との同居の有無では、全ての下位尺度において交互作用はなく、プログラム前後での得点変化パターンに差はなかった。

４）乳幼児との接触経験（表５）

乳幼児との接触経験の有無では、【子どもとの関わりに対する意識】、【夫婦や社会で子育てすることに対する意識】、【子どもや子育てに対する関心・感情】で交互作用に有意差が見られたが効果量は小さかった。つまり乳幼児との接触経験のあり群となし群は、プログラム前後での各下位尺度得点の変化パターンは同じで、【子どもとの関わりに対する意識】、【親子関係に対する意識】、【夫婦や社会で子育てすることに対する意識】、【子どもや子育てに対する関心・感情】得点が有意にプログラム後に上昇していた。また、【子どもとの関わりに対する意識】は効果量が中程度で群間に有意差があり、乳幼児との接触経験がない者よりある者の方が得点が有意に高かった。

５）被愛情感（表６）

被愛情感別では、【親子関係に対する意識】において、交互作用に有意差があり効果量 $\eta^2 = .05$ で小程度の効果量が認められ、被愛情感十分群と不十分群ではプログラム前後での得点の変化パターンに違いがあった。また群間と時間の主効果に有意な差があり効果量も大きかった。一方、【親になることに対する意識】、【夫婦や社会で子育てすることに対する意識】、【子どもや子育てに対する関心・感情】で交互作用に有意差が見られたが効果量は小さかった。つまり被愛情感十分群と不十分群ともに、【親子関係に対する意識】を除く５下位尺度得点の変化パターンは同じで、【子どもとの関わりに対する意識】、【夫婦や社会で子育てすることに対する意識】、【子どもや子育てに対する関心・感情】得点が有意にプログラム後に上昇していた。また、【親子関係に対する意識】、【親になることに対する意識】、【夫婦や社会で子育てすることに対する意識】、【子どもや子育てに対する関心・感情】は効果量が中程度で群間に有意差があり、被愛情感が不十分群より十分群の方が得点が有意に高かった。

考　　察

１．男子生徒や乳幼児との接触経験が少ない生徒にも効果的なプログラム

男子と女子で親世代になることに対する意識を比較した結果、親になることに対する意識得点と、子どもや子育てに対する関心・感情得点が、男子よりも女子の方が有意に高いことが明らかとなった。先行研究で女子の方が子どもへの親和や子育てへの受容が高いことが明らかとなっており[13]、

表 2　男女別にみたプログラム参加前後の下位尺度得点の比較

下位尺度		男子 n=1,104 平均得点	男子 n=1,104 標準偏差	女子 n=1,277 平均得点	女子 n=1,277 標準偏差	2 way ANOVA Group F値	Group p値	Group 効果量 η^2	Time F値	Time p値	Time 効果量 η^2	交互作用 F値	交互作用 p値	交互作用 効果量 η^2
子どもとの関わりに対する意識	前	17.97	5.40	19.72	5.34	50.23	.00**	.02	888.25	.00**	.27	20.47	.00**	.01
（得点範囲：5～30点）	後	20.56	5.17	21.63	4.82									
親子関係に対する意識	前	25.25	4.22	26.43	4.02	56.26	.00**	.02	577.33	.00**	.20	2.84	.09	.00
（得点範囲：5～30点）	後	27.02	3.84	27.97	3.30									
親になることに対する意識	前	35.35	4.26	37.36	3.53	158.58	.00**	.06	27.62	.00**	.01	0.24	.63	.00
（得点範囲：7～42点）	後	35.62	4.57	37.58	3.70									
夫婦や社会で子育てすることに	前	25.08	3.99	26.70	3.15	130.11	.00**	.05	163.96	.00**	.06	3.75	.05	.00
対する意識（得点範囲：5～30点）	後	25.96	3.93	27.35	3.02									
子どもや子育てに対する関心・	前	21.12	5.48	23.96	5.69	151.18	.00**	.06	629.88	.00**	.21	15.50	.00**	.01
感情　（得点範囲：5～30点）	後	23.10	5.18	25.40	5.00									
子育てに対する不安	前	18.41	4.58	17.81	4.57	6.32	.01**	.00	6.21	.01**	.00	3.92	.048*	.00
（得点範囲：6～36点）	後	18.45	4.66	18.19	4.68									

注）効果量 が中程度以上（$\eta^2 \geqq .06$）を太字で示した　**p<.01，*p<.05

表 3　きょうだいの有無別にみたプログラム参加前後の下位尺度得点の比較

下位尺度		あり n=2,122 平均得点	あり n=2,122 標準偏差	なし n=260 平均得点	なし n=260 標準偏差	2 way ANOVA Group F値	Group p値	Group 効果量 η^2	Time F値	Time p値	Time 効果量 η^2	交互作用 F値	交互作用 p値	交互作用 効果量 η^2
子どもとの関わりに対する意識	前	19.12	5.41	17.24	5.40	27.97	.00**	.01	383.55	.00**	.14	2.37	.12	.00
（得点範囲：5～30点）	後	21.30	4.96	19.79	5.21									
親子関係に対する意識	前	25.92	4.14	25.62	4.28	3.27	.07	.00	199.99	.00**	.08	1.09	.30	.00
（得点範囲：5～30点）	後	27.58	3.54	27.05	3.98									
親になることに対する意識	前	36.45	3.97	36.24	4.32	0.98	.32	.00	7.48	.01**	.00	0.44	.51	.00
（得点範囲：7～42点）	後	36.71	4.21	36.40	4.51									
夫婦や社会で子育てすることに	前	25.99	3.60	25.66	4.08	4.80	.03*	.00	45.52	.00**	.02	2.30	.13	.00
対する意識（得点範囲：5～30点）	後	26.77	3.44	26.15	4.22									
子どもや子育てに対する関心・	前	22.80	5.68	21.38	6.34	20.01	.00**	.01	214.58	.00**	.08	1.07	.30	.00
感情　（得点範囲：5～30点）	後	24.52	5.08	22.87	5.98									
子育てに対する不安	前	18.16	4.56	17.48	4.78	4.16	.04*	.00	5.54	.02*	.00	0.78	.38	.00
（得点範囲：6～36点）	後	18.36	4.68	17.92	4.67									

注）効果量 が中程度以上（$\eta^2 \geqq .06$）を太字で示した　**p<.01，*p<.05

表 4　祖父母と同居の有無別にみたプログラム参加前後の下位尺度得点の比較

下位尺度		あり n=684 平均得点	あり n=684 標準偏差	なし n=1,696 平均得点	なし n=1,696 標準偏差	2 way ANOVA Group F値	Group p値	Group 効果量 η^2	Time F値	Time p値	Time 効果量 η^2	交互作用 F値	交互作用 p値	交互作用 効果量 η^2
子どもとの関わりに対する意識	前	18.94	5.49	18.90	5.42	0.04	.85	.00	707.79	.00**	.23	0.00	.97	.00
（得点範囲：5～30点）	後	21.16	5.07	21.12	4.99									
親子関係に対する意識	前	26.04	3.94	25.82	4.24	1.45	.23	.00	463.07	.00**	.16	0.14	.71	.00
（得点範囲：5～30点）	後	27.64	3.48	27.48	3.64									
親になることに対する意識	前	36.61	3.84	36.35	4.08	0.89	.35	.00	16.59	.00**	.01	2.45	.12	.00
（得点範囲：7～42点）	後	36.74	4.19	36.65	4.26									
夫婦や社会で子育てすることに	前	26.10	3.56	25.89	3.69	1.12	.29	.00	125.96	.00**	.05	0.51	.48	.00
対する意識（得点範囲：5～30点）	後	26.79	3.56	26.67	3.53									
子どもや子育てに対する関心・	前	22.77	5.78	22.59	5.77	0.26	.61	.00	486.82	.00**	.17	0.72	.40	.00
感情　（得点範囲：5～30点）	後	24.37	5.18	24.32	5.22									
子育てに対する不安	前	18.08	4.77	18.08	4.52	0.17	.68	.00	3.96	.047*	.00	0.77	.38	.00
（得点範囲：6～36点）	後	18.19	4.81	18.32	4.62									

注）効果量 が中程度以上（$\eta^2 \geqq .06$）を太字で示した　**p<.01，*p<.05

表５　乳幼児との接触経験の有無別にみたプログラム参加前後の下位尺度得点の比較

下位尺度		あり n=1,761 平均得点	あり n=1,761 標準偏差	なし n=615 平均得点	なし n=615 標準偏差	2 way ANOVA Group F値	Group p値	Group 効果量 η^2	Time F値	Time p値	Time 効果量 η^2	交互作用 F値	交互作用 p値	交互作用 効果量 η^2
子どもとの関わりに対する意識	前	19.80	5.27	16.39	5.15	179.54	.00 **	.07	805.48	.00 **	.25	27.19	.00 **	.01
（得点範囲：５～30点）	後	21.79	4.87	19.27	4.96									
親子関係に対する意識	前	26.09	4.13	25.29	4.19	18.25	.00 **	.01	464.10	.00 **	.16	1.42	.23	.00
（得点範囲：５～30点）	後	27.68	3.49	27.07	3.85									
親になることに対する意識	前	36.71	3.87	35.65	4.28	32.21	.00 **	.01	20.75	.00 **	.01	0.03	.86	.00
（得点範囲：７～42点）	後	36.95	4.10	35.91	4.54									
夫婦や社会で子育てすることに	前	26.27	3.48	25.07	3.97	41.12	.00 **	.02	160.52	.00 **	.06	10.33	.00 **	.00
対する意識（得点範囲：５～30点）	後	26.91	3.40	26.14	3.86									
子どもや子育てに対する関心・	前	23.33	5.46	20.71	6.20	97.72	.00 **	.04	538.82	.00 **	.19	10.00	.00 **	.00
感情　（得点範囲：５～30点）	後	24.89	4.94	22.76	5.64									
子育てに対する不安	前	18.21	4.56	17.71	4.68	5.52	.02 *	.00	6.62	.01 **	.00	0.21	.65	.00
（得点範囲：６～36点）	後	18.42	4.75	18.00	4.45									

注）効果量 が中程度以上（η^2≧.06）を太字で示した　**p<.01，*p<.05

表６　被愛情感別にみたプログラム参加前後の下位尺度得点の比較

下位尺度		十分群 n=1,689 平均得点	十分群 n=1,689 標準偏差	不十分群 n=685 平均得点	不十分群 n=685 標準偏差	2 way ANOVA Group F値	Group p値	Group 効果量 η^2	Time F値	Time p値	Time 効果量 η^2	交互作用 F値	交互作用 p値	交互作用 効果量 η^2
子どもとの関わりに対する意識	前	19.43	5.43	17.61	5.26	69.47	.00**	.03	710.12	.00**	.23	0.00	.98	.00
（得点範囲：５～30点）	後	21.66	4.96	19.84	4.92									
親子関係に対する意識	前	27.32	3.03	22.39	4.46	916.91	.00**	.28	733.68	.00**	.24	132.93	.00**	.05
（得点範囲：５～30点）	後	28.47	2.58	25.24	4.56									
親になることに対する意識	前	37.43	3.35	33.96	4.42	395.20	.00**	.14	37.14	.00**	.02	10.78	.00**	.01
（得点範囲：７～42点）	後	37.58	3.67	34.45	4.70									
夫婦や社会で子育てすることに	前	26.79	3.08	23.88	4.12	382.32	.00**	.14	162.50	.00**	.06	9.12	.00**	.00
対する意識（得点範囲：５～30点）	後	27.43	2.96	24.92	4.17									
子どもや子育てに対する関心・	前	23.66	5.41	20.13	5.87	208.89	.00**	.08	568.78	.00**	.19	10.12	.00**	.00
感情　（得点範囲：５～30点）	後	25.22	4.84	22.17	5.44									
子育てに対する不安	前	18.07	4.68	18.13	4.38	0.31	.58	.00	2.60	.11	.00	2.86	.09	.00
（得点範囲：６～36点）	後	18.38	4.81	18.12	4.28									

注）効果量 が中程度以上（η^2≧.06）を太字で示した　**p<.01，*p<.05

本研究もこれを支持する結果であった。しかしプログラムに参加することで、男子も親世代になることに対する意識が向上していた。子育ては母親の役割であるという性役割分業に基づいた考えや母性神話が母親への負担を大きくしていることが問題視されているが、親世代になることに対する意識が低い男子生徒の意識が高まったということは、性別や親になる・ならないに関係なく親世代としての資質を育むことを目的としている次世代育成教育として、本プログラムは有効であると考えられる。

乳幼児との接触経験がある者の方が、子どもとの関わりに対する意識が有意に高かった。佐々木[17]は乳幼児との接触経験がある者の方が乳幼児への好意感情や育児への積極性が高いと報告しており、本研究も同様の結果であった。しかし、接触経験がない者もプログラムを通して、親世代になることに対する意識が上昇していた。陳[18]が現代の若者は家庭や地域の機能で養育性形成を行うことは難しくなってきているため、学校教育の中での座学で子どもの発達や保育について学ぶことに加え、さらに効果を上げるために体験学習を並行して実施するべきと指摘しているように、交流授業という体験学習を取り入れた本プログラムは乳幼児との接触経験が少ない生徒にとって、子どもとの関わりを学習するために効果的な方法であったと考えられる。

２．世代間伝達防止支援としてのプログラムの有効性

子どもの頃に「親は常に自分のことを気にかけ

てくれたなど」肯定的に育てられたと感じている母親は育児不安感スコアが低く、生育歴の感じ方と育児不安には関連があることが明らかとなっており[19]、本研究では親子関係の問題を抱え不適切な養育の世代間伝達が起こる可能性がある生徒の存在を確認するために被愛情感について調査した。その結果、被愛情感が不十分な生徒が約３割存在していることが明らかとなった。被愛情感が不十分な生徒は、十分な生徒よりも親子関係に対する意識が有意に上昇しており、プログラムを通して親子の深いつながりを実感していたことが示唆された。これは、交流授業の中で目の前で親子のやりとりを見て、自分の親子関係との違いを感じたり、親が子どもに向ける愛情や子育ての大変さや喜びを印象深く感じた可能性が考えられる。中谷は「離婚家庭、ひとり親家庭、ステップファミリーなど家族の多様化が進み、家族問題に葛藤を抱える生徒も多くなっている。虐待を受けたことのある（あるいは今現在も受けている）児童・生徒、児童養護施設などで育つ子どもも存在する。家族や保育、育ちの振り返りの作業においては、特別な配慮が必要となることもあろう」[3]と述べている。本研究により親子との交流という同じ体験をしても被愛情感の違いで親子関係に対する感じ方が異なることが明らかとなり、被愛情感の不十分な生徒の存在に配慮したプログラム内容にすることが重要であると考えられる。また、世代間伝達はしみじみと感情をこめて誰かと信頼関係の中で自己の葛藤を見つめる作業により解決できるのではないか[20]と言われているが、自己の葛藤を見つめる作業というのは心理的負担が大きい。そのため、親になる前から少しずつ子どもや子育てに対する自分の感情に向き合い、親になることについて考えることが望ましいと考える。本プログラムにより、被愛情感が不十分な生徒は、子育てに対する不安を高めることなく、子どもとの関わりに対する意識や子どもや子育てに対する関心、夫婦や社会で子育てすることに対する意識、親子関係に対する意識を高めていたことから、不適切な養育の世代間伝達を断ち切るための心理的準備につながると考えられる。

本研究の限界と今後の課題

本研究は、事前事後テストデザインであったため、長期的効果に対する関連要因は検証できなかった。今後プログラムの長期的効果とそれに関連する要因について明らかにする必要がある。またプログラムの効果には、生徒側の要因だけでなく、プログラム実施者側の要因や交流する乳幼児の親子側の要因なども影響していることが考えられ、今後検証していく必要がある。

結　　論

女子よりも男子の方が、また乳幼児との経験がある生徒よりも接触経験がない生徒の方が、親世代になることに対する意識が低かった。しかし、いずれも「親子交流を通して親になることを考えるプログラム」を通して、親世代になることに対する意識が向上していた。

被愛情感が不十分な生徒は約３割存在していた。被愛情感が不十分な生徒は十分な生徒よりも、プログラムにより親子の深いつながりを感じていた。また子育てに対する不安を高めることなく、親世代になることに対する意識が向上していた。

以上より、本プログラムの効果に性別、乳幼児との接触経験、被愛情感が関連することが確認された。特に被愛情感が不十分な生徒の存在に配慮したプログラム内容にすることが、親になる前から始める子ども虐待の防止対策として効果的なプログラムとするためには重要であることが示唆された。

謝　　辞

本研究のためにご協力くださいました対象校の関係者の方々や対象者の皆様、プログラム検討会の皆様、公益財団法人いしかわ結婚・子育て支援財団の山本康人様に心から感謝申し上げます。

本研究は公益財団法人いしかわ結婚・子育て支援財団からの受託研究として行われた。また本研究は石川県立看護大学大学院看護学研究科看護学専攻博士前期課程における修士論文の一部を改変したものである。本研究の一部は、日本子ども虐待防止学会第23回学術集会ちば大会にて発表した。

利益相反

利益相反に関する開示事項はありません。

引用文献

１）マーラー・R，ブラザード，デイヴィド・B.ハーディー：第17章心理的虐待，坂井聖二監訳，虐待された子ども―ザ・バタード・チャイルド―（初版），明石書店，737－772，東京，2003
２）渡邊茉奈美：「育児不安」の再検討―子ども虐待予防への示唆―，東京大学大学院教育学研

究科紀要，51，191－202，2011
3）中谷奈津子：親性準備性にむけた「保育体験」における効果：文献レビューからみる小・中・高家庭科教育，大阪府立大学紀要（人文・社会科学），64，37－49，2016
4）中野由美子：生育体験の次世代育成力への影響―性差と保育実習体験の効果―，目白大学総合科学研究，4，119－128，2008
5）伊藤葉子：中・高校生の「子どものイメージ」の発達，千葉大学教育学部研究紀要，53，85－90，2005
6）Gordon M：Roots of Empathy：responsive parenting, caring societies. The Keio Journal of Medicine，52(4)，236－243，2003
7）Sasso TK, Williams SK：The Effectiveness of the Parenting Curriculum: An Evaluation of High School Students' Questionnaire Responses. Journal of Family and Consumer Sciences Education，20(2)，1－11，2002
8）小島康生，水野里恵，塚田みちる：高校生を対象とした赤ちゃんとのふれあい体験実習の効果―赤ちゃんイメージと子ども・子育て観における変化―，中京大学心理学研究科・心理学部紀要，11(1)，15－27，2011
9）千原裕香，西村真実子，成田みぎわ，他：青年期前期における「親世代になることに対する意識尺度」の作成と信頼性・妥当性の検討，日本看護科学会誌，39，211－220，2019
10）Cicchetti D, Rogosch FA, Toth SL：Fostering secure attachment in infants in maltreating families through preventive interventions. Development and Psychopathology，18(3)，623－649，2006
11）Main M, Hesse E：Parents' unresolved traumatic experiences are related to infant disorganized attachment status: Is frightened and/or frightening parental behavior the linking mechanism?, Greenberg MT, Cicchetti D, Cummings EM, editors. Attachment in the preschool years，University of Chicago Press，161－182，Chicago，1990
12）Milan S, Lewis J, Ethier K, et al.：The impact of physical maltreatment history on the adolescent mother-infant relationship: mediating and moderating effects during the transition to early parenthood. Journal of Abnormal Child Psychology，32(3)，249－261，2004
13）伊藤葉子：中・高校生の親性準備性の発達，日本家政学会誌，54(10)，801－812，2003
14）佐々木綾子，小坂浩隆，末原紀美代，他：親性育成のための基礎研究(2)－青年期男女における乳幼児との継続接触体験の心理・生理・脳科学的指標による男女差の評価－，母性衛生，51(2)，406－415，2010
15）佐々木綾子，末原紀美子，町浦美智子：青年期男女の親性を育てる乳幼児との継続接触体験の内容分析による評価（第１報），思春期学，27(3)，270－282，2009
16）千原裕香，西村真実子：高校生のための「親子交流を通して親になることを考えるプログラム」の効果，小児保健研究，81(4)，351－358，2022
17）佐々木綾子：親性準備性尺度の信頼性・妥当性の検討，福井大学医学部研究雑誌，８(1)(2)合併号，41－50，2007
18）陳省仁：現代日本の若者の養育性形成と学校教育，子ども発達臨床研究，１，19－26，2007
19）川崎裕美，海原康孝，小坂忍，他：母親の育児不安と家族機能に対する感じ方との関連性の検討，小児保健研究，63(6)，667－673，2004
20）渡辺久子：母子臨床と世代間伝達，金剛出版，201－203，東京，2000